



TITLE:

# 物象化論と役割理論 -廣松渉の思想形成における『資本論の哲学』 -

AUTHOR(S):

渡辺, 恭彦

---

CITATION:

渡辺, 恭彦. 物象化論と役割理論 -廣松渉の思想形成における『資本論の哲学』 -. 文明構造論 : 京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 2014, 10: 181-217

ISSUE DATE:

2014-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/191197>

RIGHT:

## 物象化論と役割理論 —廣松渉の思想形成における『資本論の哲学』—

渡 辺 恭 彦

はじめに

1. 物象化とは何か
2. 戦後日本のマルクス研究と『資本論の哲学』執筆まで
3. マルクス『資本論』の冒頭商品
4. 二つの価値と共通の第三者としての抽象的人間労働
5. 価値形態論の四肢的構造
6. 物象化論と観念的扮技による役割理論

はじめに

物象化論、かつてウェーバーやジンメルが扱い、ルカーチが『歴史と階級意識』によって再興させたこの概念を、戦後日本で広く定着させたのは、廣松渉であるといつてよいだろう。それも、もっぱら西洋で隆盛した物象化概念を日本に根付かせたというよりも、廣松が独自の文脈で着想し、その後コミットした党派的な闘争の中で打ち出したという方が適当である。廣松自身が振り返るところでは、「物象化という現象を強烈に印象づけられたのはデュルケームを介してである」<sup>1</sup> という。駒場時代に社会学の講義で紹介されたデュルケームの『社会学的方法の規準』を繙いた由であるから、廣松は早くから独自の物象化論を着想し、彫琢していったということができよう。<sup>2</sup>

---

<sup>1</sup> 廣松渉「本に会う 学生時代の自覚的渉猟」：『群像』（講談社、1992年5月）、325頁。

<sup>2</sup> 廣松が物象化のモチーフを見いだしたのは、「社会的事実」を「物」として捉えるデュルケームの考え方であり、その後マルクスの物象化に接続されたであろうことは、石塚良次氏が指摘している。「廣

1933年生まれ、の廣松が学術誌に論文を公表し始めたのは1960年代である。その時期の左翼運動において主流であったのは、失われた本来の人間像を取り戻すために革命的に投企するという疎外革命論であった。こうした状況下で1966年に廣松が発表した「疎外革命論批判 序説」は、黒田寛一が唱えていた疎外革命論への党派的な対抗意識が色濃く出ているものであった。またこの時期廣松は、『ドイツ・イデオロギー』編集問題を文献学的に考証することにより、初期マルクスと後期マルクスのあいだには思想の質的な飛躍があることを主張していた。すなわち、マルクスは『経済学・哲学手稿』段階では活動主体とその客体の直接的な関係に即して考えていたが、『ドイツ・イデオロギー』段階では、諸個人の社会的協働関係がまず成立し、その自然生的なあり方から、人間から独立な事象的な力ないし形態があらわれるとしたのである。こうして社会的関係に着目する後期マルクスの理論に定位し、廣松は「疎外論から物象化論へ」というテーゼを打ち出すに至ったのだった。

『資本論』におけるマルクスの価値形態論および物神性論を扱った研究は汗牛充棟の観があり、それらを踏まえた廣松物象化論にかんする研究も多数蓄積されている。廣松物象化論が影響力を誇った時期には、『クリティーク』第8号（1987年7月）で物象化論の特集が組まれ、廣松自身も座談会「物象化論の批判力」に出席している。収録された論考のなかでも本稿で注目すべきものとして、浅見克彦「物象化論のイデオロギー的冒険」、小倉利丸「逸脱する身体性 物象化論の諸問題」、大庭健「批判的〈実践知〉としての〈物象化論〉」などが挙げられる。

浅見論文では、物象化論は一つの社会認識批判論であるとし、物象化的システムへ従属する主体の自己拘束的行為に着目している。そこでは、物象化論は主体性の価値をゼロ化するものではなく、物象化的錯認として存立する事態をポジティブに展開し、実践へと開く途を提示するものとされている。浅見氏によれば、マルクスは個々の商品交換が行われるさいの諸商品に共通の同一者（抽象的人間労働）を実体的な価値としている。それに対して廣松理論では、この価値は錯認的な実体であり、これを成り立たせている諸労働の社会的関係規定はさらにメタレベルに立つものとされる。すなわち、社会的システムに内在

---

松渉「四肢的存在構造論と経済学」：鈴木信雄責任編集『経済思想第10巻 日本の経済思想2』（日本経済評論社、2006年）、351～394頁所収、377頁。

する主体の能動性を担保するためには、共通の同一者に完全には同一化しないかたちでの行為が必要条件となるのである。

浅見氏によれば、物象化論が自らの閉塞的悪循環に陥らないためには、同一化的錯認に基づく関係性のネジリ行為が有効であるという。そしてその行為として次のように役割行為を挙げている。「他者及び情況による役割期待は、ある場の総体的布置の関係をある点で見切って、縮減的にある一つの期待をデッチ上げる形でしか対自化しえないので、実際の役割扮技行動は、その錯認的同一性への賭けとしてしか「実現」せず、結局その情況的布置の關係に、期せずしてネジレを持ち込むことになり、他者もそのネジレを前にして、同様に錯認的同一性に賭する役割扮技行動を起こし、折り重なるネジレを定立することにならざるをえないのだ（二重の不確定性）」<sup>3</sup>

小倉論文では、廣松の役割行動論と階級社会論とは論理的に結びつかず、労働者が資本家による役割期待を逸脱ないし裏切り資本に抵抗するという契機が閉ざされると問題点が指摘されている。

大庭論文では、廣松物象化論を批判理論として位置づけ、「物象化」は、社会的に妥当し再生産されていく関係を「構造化」するのではなく、批判され超克さるべき事態であるという。大庭氏は次のように結論づけ、システム内の当事者が他なる可能性へと投企すべきものとして物象化論をポジティブに捉えている。「物象化論は、「対象世界〈内部〉」で当事者として二者択一を提示し、そこでのシステム状態の「揺らぎ」—相転移の（計算不能な）可能性に、己れの「揺らぎ」において当事者として関わる「論」である他はないのである。」<sup>4</sup>

近年でも『季刊経済理論』（2011年7月）で「廣松物象化論と経済学」の特集が組まれている。田上孝一論文「マルクスの物象化論と廣松の物象化論」においては、廣松が物象化論をフェティシズムと同一視しており、物象化概念を明確に定義しておらず、主観主義的な認識論的同一化に陥っていると指摘されている。さらに、廣松は物象化は語るが物象

---

<sup>3</sup> 浅見克彦「物象化論のイデオロギー的冒険」：『クリティーク』第8号（青弓社、1987年7月）、7～32頁所収、30頁、傍点ママ。

<sup>4</sup> 大庭健「批判的〈実践知〉としての〈物象化論〉」：『クリティーク』第8号（青弓社、1987年7月）、78～100頁所収、99頁、傍点ママ。

化の止揚は語っていない、すなわち、物象化を抜け出すことによるビジョンを廣松は打ち出していないと批判している。

大黒弘慈論文「価値形態論における垂直性と他律性—関係に先立つ実体」においては、役割理論および構造変動の問題を廣松が扱っていることに留目しつつも、『資本論の哲学』の射程内での問題点を指摘している。すなわち廣松にあつては、ある実体は次々とより高次元の関係に把握されるという論理になっているため、「当該の関係が他の関係でもありえたという偶然性、また、関係の中に回収されてしまう実体ではなく、関係を作り出し関係を衝き動かす実体の側面が抜け落ちてしまう」という。<sup>5</sup>

さらに、佐々木隆次『マルクスの物象化論』（2011）では、廣松の理論が真正面から批判検討されている。佐々木氏によれば、廣松の物象化論は、認識論主義に傾いており、物象化を生み出す関係を見ていないという。それゆえ、物象化の外部に立ち、社会システムに対して外在的・批判的な視座に立ちうる前衛党を例外的な主体として措定するほかなかったという。<sup>6</sup> してみれば、廣松の理論においては、システム内在的立場から物象化を抜け出すことは不可能であり、啓蒙主義的な側面をまぬがれえない。

また廣松の評伝を著した熊野純彦氏は、廣松物象化論を踏まえつつも、必ずしもそれに依拠しない方法で『資本論』を読み解いている。たとえば、価値形態論の第Ⅰ形態 単純な価値形態において、等置されたリンネルと上着のあいだには互換的ではない関係、非対称性があるとする見方は廣松の価値形態論解釈とは異なるように思われる。<sup>7</sup>

このように廣松物象化論をめぐるのは、いまだにさまざまな論議がなされている。<sup>8</sup> い

---

<sup>5</sup> 大黒弘慈「価値形態論における垂直性と他律性—関係に先立つ実体」：『季刊経済理論』第48巻第2号（桜井書店、2011年7月）、28～39頁所収、29頁。

<sup>6</sup> 佐々木隆次『マルクスの物象化論 資本主義批判としての素材の思想』（社会評論社、2011年）、123～124頁。なお、2012年9月17日に首都大学東京においてワークショップ「マルクスと廣松の物象化論をめぐる」が開催された。後に提題者によって以下の論考が提出されている。勝守真「マルクスの商品論と廣松哲学の変形」、日山紀彦「21世紀マルクス「価値論」のための三提言」、佐々木隆治「廣松のマルクス解釈の「地平」—物象化論ワークショップに関する若干のコメント—」：『人文学報』第474号（首都大学東京人文科学研究科、2013年3月）。

<sup>7</sup> 熊野純彦『マルクス 資本論の思考』（せりか書房、2013年）、58頁。同書は、『資本論』解釈で廣松と異なる立場にあった宇野学派の議論も多く参照されており、その全面的な検討は本稿での射程を超える。

<sup>8</sup> 本稿執筆と相前後して以下の論文が発表されたが、検討できていない。張一兵「廣松の物象化パラダイムの起源—『物象化論の構図』の構造環境論による解説」（中野英夫 訳）：『情況』（情況出版、

ずれにも共通していえるのは、廣松物象化論には商品世界を内側から突破する引き金となるような裂け目があるか否か、いいかえれば、当事者の立場に動的なモメントをもたらす〈非対称性〉があるか否かが争点となっているということである。

本稿では、こうした先行研究を踏まえながら、廣松渉その人の思想展開を視野に入れ、廣松物象化論に新たな視点を提供することを試みる。より具体的にいえば、廣松が物象化論を打ち出したのと相即して役割理論に着目した筋道を、主に『資本論の哲学』をもとにして明らかにする。すなわち廣松は、物象化された商品世界を当事者の立場から超出する概念として、役割行動として営まれる対象活動的協働に着目するに至ったが、そのきっかけとなった著作として『資本論の哲学』を位置づけることが可能であるという見通しのもとに論じていく。

あらかじめ本稿で扱う論点を素描しておけば次のようになる。

- (1) 廣松以前にも日本のマルクス研究史において物神性は超出すべきものとして議論の俎上にあげられており、廣松はあまたある物象化現象の中でも商品世界の物象化をもっとも乗り越え難いものと規定していること。
- (2) 物象化をまぬがれるには、商品世界そのもののありかたを理解しなくてはならず、商品世界を内側から抜け出る方途を廣松は模索していること。
- (3) 商品世界での交換を可能にしているのは、共通の第三者である抽象的人間労働であり、言い換えれば、社会的諸関係の函数であるということ。
- (4) 廣松は交換を扱った箇所である『資本論』第一章の価値形態論を論じるさいに、非対称性を見出さず静態的に分析していること。廣松が商品世界を超出する動態的な契機を見出しているのは商品交換の場面ではなく、商品を生産する場面であること。
- (5) 物象化論によって『資本論』を読むとき、商品世界での交換を成り立たせる共通の第三者の立場を、交換する当事者が“観念的に扮技”することにより交換が行われること。社会的協働の場面、すなわち生産の場面における役割扮技行動こそが実践的次元での物象化を超出する概念であるという構想に至ったこと。

---

2014年9・10月)、162～184頁所収。吉田憲夫「廣松渉氏の「貨幣生成論」について」：『情況』（情況出版、2014年9・10月)、185～202頁。

## 1. 物象化とは何か

まずは物象化論について廣松のいうところを見ておこう。廣松が物象化論の概念史について触れているのは、「マルクスの物象化論」『情況』（1968 年 9 月）にまでさかのぼる。そこで廣松は、社会思想史研究者であり、初期マルクスについての著作を持つ城塚登の整理を引いている。

城塚論文は、雑誌『理想』の主体性特集に掲載されたものであり、ルカーチ物象化論を取り上げている。この論文で城塚登は、合理化の基盤として資本主義的商品生産による「抽象化」を置いた点にルカーチ物象化論の意義を認めている。しかし、ルカーチが労働者の自己認識を実践と結びつけるのに対して、城塚は社会変革のための社会的実践を通じて、はじめて労働者は商品としての自己を認識し自覚的主体となるという。

廣松は、この城塚論文から次の箇所を引き、ルカーチの影響力を認めている。

サルトルの『弁証法的理性批判』がルカーチの『歴史と階級意識』の〈物象化〉論を手がかりとしていることは、すでにしばしば指摘されてきた。メルロオ＝ポンティの『弁証法の冒険』もルカーチの〈物象化〉論を一つの理論的基礎としているし、……西ドイツにおいても、テオドル・W・アドルノーの弁証法的立場はルカーチの問題意識を受けついでおり、その流れを汲むユルゲン・ハバーマスの『理論と実践』にも〈物象化〉論の影響が見られる。また日本の場合も、例えば竹内芳郎氏の『弁証法の復権』は、ルカーチによる階級意識の物神化を批判しつつも、〈物象化〉論を含むルカーチの弁証法把握を手がかりとして論を進めている。〔廣松が引いている箇所はここまでである—引用者〕／このように、ルカーチの「物象化」論は、現代の西欧や日本の思想にかなり広く深い影響を与えており、いわゆる「疎外論」が一つの乗り越えがたい壁に突きあたり苦悶しているのに対し、より強力な「主体性」回復の論理を提示しているかに見える。<sup>9</sup>

しかし、ここで挙げられている論者について、廣松は疎外論と物象化論を同趣のものとし

---

<sup>9</sup> 城塚登「現代思想における主体性の問題—「物象化」の批判的再検討—」：『理想』（理想社、1968 年 1 月）、19～26 頁所収、20 頁。

て扱う傾向があるとし、物象化論再興の火付け役と目されるルカーチについても、「疎外論と物象化論との区別性を明確にすることによってのみ、彼が『歴史と階級意識』で展開した積極的なものを真に生かしめることはじめて可能になるように思われる。」と述べている。

さらに時代がくだって、物象化論を主題的に扱った著作『物象化論の構図』（1983）においても、「物象化論」という用語を用いた論者を挙げ、その中でも特に影響力を持った人物としてルカーチを挙げている。

偕、「物化」（Verdinglichung）とか「物象化」（Versachlichung）とかいう概念は、一今ここでは、シェリングの *Be-dingung* や初期ヘーゲルの *das-zum-Dinge-Machen* といった用語法との概念史的な脈絡といった問題には一切立ち入らずに話を運びたいのだがルカーチによって顕揚されるまで、マルクス主義者たちのあいだでは忘失されてきた看があった。これらの用語は、むしろ、新カント学派のハインリッヒ・リッケルトやマックス・ウェーバー、それにまた、ゲオルグ・ジンメルやエルンスト・カッシーラーなどにおける用例を通じて、折々に眼を惹くようになっていた。が、これらの詞が哲学者や社会学者たちの間で割合いとポピュラーに用いられるようになった機縁は、何といてもルカーチによる術語的頻用にあると言えよう。<sup>10</sup>

それではルカーチはどのように物象化を扱っているのでしょうか。廣松の物象化論と比較するためにルカーチの用法を参照しよう。1923 年、ルカーチは論文集という性格の強い『歴史と階級意識』（1923）を著わした。その中でも、質量ともに主要論文といってよい「階級意識」「物象化とプロレタリアートの意識」において、物象化論について詳しく論じている。ルカーチは、マルクスの『資本論』に注釈を加える形で物象化を次のように定義した。

---

<sup>10</sup> 廣松渉『物象化論の構図』（岩波書店、1983 年）、62 頁。引用箇所は初出「唯物史観の宣揚」：『思想』（岩波書店、1982 年 5 月）、23～54 頁所収、に「疎外論の止揚と物象化論」として新たに追補されたものである。



商品が社会的存在全体の普遍的カテゴリーである場合にのみ、商品はその偽りのない本質的あり方において把握されることができる。このような連関のなかではじめて、商品関係によって生じてくる物象化は、社会の客観的發展に対しても、この發展に対する人間の態度に対しても、決定的な意味をもつようになる。すなわちこの物象化は、物象化がそこに表現されている諸形態に人間の意識が従属させられているということに対しても、またこの物象化の過程を把握したり、物象化の人間を破滅させる作用に反抗したり、その作用のために生じた「第二の自然」のもとに隷属している状態からみずからを解放しようとしたりする人間の試みに対しても、決定的な意味をもつようになるのである。マルクスは物象化の基本的現象を次のように述べている。〈中略〉『資本論』第一巻第一章第四節 商品の物神的性格とその秘密が引用されている]

以上のような構造的な基本的事実において、とりわけ次のことが確認されねばならない。すなわち、この物象化の基本的事実によって、人間独自の活動、人間独自の労働が、なにか客体的なもの、人間から独立しているもの、人間には疎遠な固有な法則性によって人間を支配するもの、として人間に対立させられる、ということである。〈中略〉したがって商品形態が普遍的になると、主体的な点でも客体的な点でも、商品に対象化された人間労働の抽象化が生ずる。<sup>11</sup>

ルカーチは、商品交換が行きわたった社会、すなわち資本主義社会において物象化現象は如実にあらわれるという。そこでは、客体的なものは法則化された商品の運動の世界としてあらわれ、主体的なものすなわち人間の活動は、合理化された労働力商品としてあらわれることとなる。主体がおかれている具体的な状況は資本主義社会の諸法則の下にある。そして、こうした個々の主体の契機と社会の発展過程のはざまにおかれていることを意識するのが、プロレタリアートである。ルカーチは、資本主義社会を具体的に意識的に超える途をプロレタリアートに託したのだった。

資本主義社会を内在的に超出するという問題を一貫して追求している点では、ルカーチと廣松は立場を同じくしている。しかし、廣松は「疎外」と「物化」とを、概念的に明

---

<sup>11</sup> ルカーチ『歴史と階級意識』（城塚登・古田光 訳、白水社、1975年）、166～167頁。

別することなく、離接不全のまま使用した憾がある。」とルカーチの用法を問題視したのだった。廣松によれば、後期マルクスの物象化概念は、初期マルクスの疎外概念とは明確に区別されるべきものであるという。さらに、疎外と物象化が大同小異とされてしまうのは、「物象化」概念が「主体—客体」図式の枠内で“主体的なものの客体的定在化”という構図で措定されているからであるという。近代における「主体—客体」図式の超克という問題を生涯追求した廣松にあっては、ルカーチが物象化現象を定義する際も主体と客体に分けて分析している点で、物象化論において立場を分かち。じっさい、後に廣松は、物象化論はルカーチを経由してのものではないと述べている。<sup>12</sup>

「主体—客体」という図式を前提とした通俗的な物象化＝物化で表象されるものとして、廣松は以下の三つを挙げている。すなわち、人間が奴隷商品として売買される、機械の歯車になってしまうという人間そのものの“物”化。群衆化された人々の動きが、個々の人間の意識とは独立のものとなったり、行動様式が固定化されるといった人間の行動の“物”化。そして、もともとは人間主体に内在していた精神的・肉体的な力能が体外に流出して芸術作品などに凝結するといった人間の力能の“物”化である。廣松によれば、こうした“物”化理解も物象化現象に数えられうるが、後期マルクスの「物象化」概念は、その概念内容に即してみると、これとは異質の発想と構制にもとづくものとなっている。

廣松によれば、マルクスは「物象化」を定義風に述べているわけではなく、頻繁に用いる言葉でもない。しかしその用法に照らしてみれば、後期マルクスの「物象化」とは、主体的なものが客体的なものに成り変わるといった「主—客」の図式で捉えるのではなく、人と人との社会的な関係が物と物との関係、ないし物の性質、ないしは自立的な物象として現われる事態を指すという。さらに、マルクスの物象化論を要約して、廣松は次のようにいう。

---

<sup>12</sup>「それからもう一つ、共同主観性・間主観性の存立構造にかかわる四肢的構造論が物象化論とどうつながっているかという問題ですけれども、実は、私が物象化というような現象に強く問題を感じるようになった機縁は、デュルケーム学派のフランス社会学の議論なんです。＜中略＞というわけで、物象化論も、私の場合、ルカーチの媒介じゃないんです。」高橋順一編・対談『現代思想の境位』（エスエル出版会、1984年）、44～45頁、引用箇所は、石塚前掲書に拠った。

人々の間主体的な対象関与的活動の或る総体的な連関態、当事者の日常意識には（そして、また、システム内在的な準位にとどまっているかぎりでの体制内的“学知”にとっても）、あたかも物どうしの関係ないしは物の性質ひいては物的対象性であるかのように映現するという、このフュア・ウンスな事態、それがマルクスの謂う「物象化」なのである。<sup>13</sup>

それでは、マルクスの物象化論をこのように理解していた廣松は、どのように『資本論』を読み解いていったのだろうか。廣松が『資本論』を扱うまでの日本の『資本論』研究史を振り返りつつ、廣松がおかれている文脈を確認しておきたい。

## 2. 戦後日本のマルクス研究と『資本論の哲学』執筆まで

マルクス主義哲学者を自任した廣松渉は、独自の哲学体系の構築をすすめる一方で、早い時期からマルクス・エンゲルスの評伝（『青年マルクス論』、『エンゲルス論』）や『ドイツ・イデオロギー』編集問題にかんする文献学的研究を草している。『資本論』については、「私の研究プラン「価値」の存在性格」『日本読書新聞』（1967年7月）や「マルクスの物象化論」『情況』（1968年9月）などで触れている。しかし、『資本論』を主體的に扱った論文は意外に遅く、1973年5月から13回に亘って『現代の眼』に連載された「資本論の哲学」が最初である。同連載は、廣松が全共闘を支持し名古屋大学を辞職した後の浪人時代に執筆されたものであるが、毎月の連載という事情もあるせいか叙述に繰り返しが多く、廣松の著作の中では読みやすいものとはいえない。さらに、同書が扱っているのは、マルクスの『資本論』全三巻のうち、第一巻第一章「商品」第二章「交換過程」論までであり、論も完結しているわけではない。しかしやはり、その後の廣松のマルクス研究に照らしてみても、まとまった『資本論』解釈としては、連載稿を収録した『資本論の哲学』（1974）がまず第一に扱われるべきだろう。そして『資本論』全三巻を物象化論の構制に

---

<sup>13</sup> 廣松前掲書、66頁。廣松は「物象化」という概念をマルクスの用語法よりも拡張して使用しているという。廣松渉『資本論の哲学』（平凡社、2010年）、289頁。『資本論の哲学』の初版は1974年に現代評論社から出版され、増補新版は1987年に勁草書房から出版された。本稿では、石塚良次氏による解説が附された平凡社ライブラリー版を用いた。

即して解釈するという廣松の試みは、その後公刊された専門家との共著『資本論を物象化論を視軸にして読む』（1986）などに引き継がれたというのが実情である。

しかし『資本論の哲学』では、廣松が哲学的に最も注目に値すると位置づける第一章第四節「物神性論」が価値形態論を踏まえ論じられており、そこから廣松の読み筋を浮かび上がらせることが可能であろう。

廣松自身『資本論の哲学』のはしがきでこう断っている。

「資本論の哲学」と謂うとき、著者としては別段『資本論』から哲学的な諸命題を拾い蒐めて“哲学要綱”を編もうという意趣はない。さりとしてまた、卑見の強引な投入を宗とするものでもない。著者としては、物象化論の視座からするマルクス価値論の理解、とりわけ価値形態論と物神性論の再解釈に当面の力点を置いたとはいえ、飽くまでマルクスの行文に即しつつ『資本論』の提題を支える哲学的問題性プロブレマティックの意義と射程を顕彰するにとどめた心算である。況んや、著者の謂う間主観的インターズブジェクティブ四肢的存在構造を経済学のこの基礎場面で追覈しようという課題意識も、本書では必ずしも一意的に押出してはいない。<sup>14</sup>

ここで宣言しているとおり、廣松は『資本論の哲学』で得手勝手に『資本論』の独自の読み方を押出しているわけではなく、マルクスの著作である『経済学批判要綱』、『経済学批判』、『資本論』の叙述に定位し、それも日本の『資本論』解釈の古典的研究を踏まえたものとなっている。それゆえ、世界的な水準を誇った日本のマルクス研究の一地点に廣松は立っているといえるだろう。ここでは、廣松が日本の『資本論』研究史上のどこから出発しているか、簡単に振り返る。

『資本論の哲学』巻末に附された「増補 ルービンの問題に言寄せて」の箇所以示しているように、戦後における日本での『資本論』研究の出発点として廣松が挙げているのは河上肇、櫛田民蔵の到達点、および雑誌『評論』に昭和22年の1月号から9回連載された「資本論研究会」の討論記録である。後者は昭和23年に『資本論研究』として刊行さ

---

<sup>14</sup> 廣松前掲書、15頁。

れており、第三回が価値形態、第四回が価値形態の発展と交換過程、第五回が商品の物神性となっている。それに対して『資本論』の実際の章立ては、第一章「商品」、第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」、第二章「交換過程」となっている。つまり、研究会は『資本論』の叙述の順に行われたのではなく、価値形態論、交換過程論が先に議論されたのであった。「増補 ルービンの問題に言寄せて」は対話体であるため、必ずしも廣松の主張が明確に打ち出されているとはいえないが、上に挙げた研究会で物神性の討論が後まわしにされたことに鑑みて、物神性論が重視されていなかったことが示唆されている。それでは実際には、『資本論』研究会の参加者は物神性をどのように捉えているのだろうか。『資本論研究』第五回商品の物神性の議論を見ておこう。

向坂 社会的に、つまり資本主義の中に生きている人間が全体として物神性を明確に意識する場合には、社会主義になるのじゃないか。むしろその社会で物神性を知るに至る階級が出来てくるとしても、そういう階級も一挙にして、その階級全体が物神性を意識するわけではなくて、やはり意識の高い人から少しずつ意識して行くわけだ、その物神性が明確に意識された時には資本主義を変革する勢力に成長するわけだ。

宇野 意識の高い人がそれを意識すると、それは物神性から解除されたということになるのか。

向坂 社会全体として客観的に物神性的な関係があるわけだ、その中に生活している以上は。

宇野 マルクスも商品社会から出て生活しているわけではない、その点では理解はするが同じだ。理解したからといって商品経済に变りはない。

向坂 その理解を逆にいうと、社会主義を実現するような力に、その社会の一定要素がなつた場合に、そういう意識が取除かれると同時に物神性も取除かれる。<sup>15</sup>

ここにみられるように、向坂逸郎と宇野弘蔵のあいだで物神性が議論の俎上に上げられ

---

<sup>15</sup> 宇野弘蔵・向坂逸郎編『資本論研究—商品及交換過程—』（河出書房、1948年）、292～293頁。第五回の出席者は、相原茂、宇野弘蔵、大内兵衛、岡崎三郎、久留間鮫造、向坂逸郎、末永茂喜、鈴木鴻一郎、対馬忠行の9名である。

ている。『資本論』の翻訳者でもある向坂逸郎は、資本主義を変革したあとの社会主義を実現するために物神性は抜け出すべきものと規定している。しかし、いかにして物神性から抜け出すことが可能であるかの説明は研究会では行われずじまいであった。<sup>16</sup>

先にも述べたように、左翼運動において主流であったのは黒田寛一らの唱えた疎外革命論であったことに加えて、学術的な『資本論』研究自体においても物神性に焦点をあてたものが優勢とはいえない状況にあった。

つまり、日本の『資本論』研究史と廣松自身の実践活動に鑑みると、廣松の『資本論の哲学』は、党派闘争という実践的なマルクス主義理論と『資本論』の学術的な読解とのいわば合流地点に位置する著作であるということができさるだろう。

次節では『資本論の哲学』の行論につき従いながら、廣松の問題意識を見定めていく。

### 3. マルクス『資本論』の冒頭商品

マルクスは『資本論』を次の一文で始めている。

資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの「巨大な商品の集まり」として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる。<sup>17</sup>

ここで商品が汎通する資本主義社会の分析を商品からはじめることをマルクスが宣言していることは、この箇所を読む限りでは特に違和感をもたらない。しかし、生産物を生産し、生産物を交換することで商品が成り立つということを考えれば、歴史的にも論理的にも「生産物」が商品に先行することが分かる。それゆえ、ここでマルクスが「生産一般」ではなく「商品」を端初に据え、抽象的なものから具体的なものへという行き方を採

---

<sup>16</sup> 永谷清によれば、「商品生産者の社会」の呪縛から最初に脱出したのが宇野弘蔵であり、それは形態論に徹し商品論から物神性論を切り捨てることによってなされたという。永谷は、宇野が流通形態論に徹することにより切り捨てたマルクス物神性論の意義を再発掘し、宇野商品形態論に突き付けた点に廣松物象化論の意義を見出している。永谷清「価値形態論と物象化論—宇野経済学 対 廣松物象化論—」：『思想』（岩波書店、1997年5月）、50～66頁所収、57頁。

<sup>17</sup> マルクス『資本論』第1分冊（岡崎次郎 訳、大月書店、1972年）、71頁。

っていることは重要な意味を持っている。廣松は、こうした叙述に至るまでに、マルクスにも葛藤があったと次のように指摘する。「マルクスがあゝの『序説』で上向法的展開を明言したあとの時点でも「生産一般」から出発する予定だった一時期があるということ、だから「商品」から出発するということは必ずしも絶対的な要件ではないかもしれない」。<sup>18</sup>

『資本論』という体系的著作を叙述するにあたって、マルクス自身にも方法論的な紆余曲折があった。『資本論』（1867）に先立って発表された『経済学批判』（1859）の序説でマルクスは経済学の方法について述べている。17世紀の経済学者が採ってきたのは、現実的で具体的なもの、現実的前提、たとえば経済学でいえば社会的生産行為全体の基礎であり主体である人口から出発する方法であった。しかし、これは間違いであるとマルクスはいう。それに対して、経済学の学問的手続きの方法として採るべきなのは、抽象的なものから具体的なものへと進む上向法であるという。マルクスはヘーゲル法哲学の批判的解釈から研究を始め、『資本論』で折に触れてヘーゲルに言及している。『経済学批判』序説の「経済学の方法」においても、ヘーゲルの方法についてこう述べている。

そこでヘーゲルは、実在的なものを、自分を自分のうちに総括し、自分を自分のうちに深化し、かつ自分自身から動きだす思考の結果であるとする幻想におちいったのであるが、しかし抽象的なものから具体的なものへ上向する方法は、ただ、具体的なものを自分のものにするための、それを精神のうえで具体的なものとして再生産するための、思考にとつての仕方にすぎない。だがそれは、けっして、具体的なもの自身の成立過程ではない。<sup>19</sup>

ヘーゲルの論理では結局上向の過程がそのまま現実性の成立過程と一致する、すなわち論理性と歴史性が一致するという存在了解になっているという次元でヘーゲルを批判するものであると廣松は分析する。

『資本論』冒頭で何気なく挙げられたかに見える「商品」も、こうしたマルクスの方法

---

<sup>18</sup> 廣松渉『資本論の哲学』（平凡社、2010年）、26頁。

<sup>19</sup> マルクス『経済学批判』（武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦 訳、岩波文庫、1956年）、313頁。

論的な葛藤をみると、叙述上の端初（Anfang）として自覚的に採られたものであることを読み取ることができるだろう。それでは、ヘーゲルと対照させたとき、マルクスはどのような方法を採用しているのだろうか。廣松は『資本論の哲学』の序破章でヘーゲル弁証法とマルクスの論理構成をつき合わせている。

廣松はヘーゲルの端初論をして、始めが終わりであり、終わりが始めであるという円環運動をなしていると結論づける。ヘーゲルが挙げている櫨の実の比喻を用いて、櫨の実はい自己展開して櫨の大樹へと成長するのだが、「櫨の実」には、それが大樹に生長する将来的展開が即自的な「概念」として端初的に既在する」<sup>20</sup>と廣松は説明する。この生長・展開の全過程を通じて生物としての自己同一性が保たれており、この自己運動する実体＝主体を廣松は重くみている。

ヘーゲルは『精神現象学』を直截的な意識である感覺的確信からはじめている。個物である「このもの」を知る直接的な「経験する意識」は、反省的第三者である「われわれ」とは区別される。ここでいう「われわれ」は、「観望 zusehen」しているだけであり、建前としては舞台回しの役を勤めるわけではないという。いいかえれば、対象に積極的にはたらしかけることはない。感覺的確信における「このもの」とは何かを検討したとき、「このもの」は、「このもの」でも「かのもの」でもなく、このものならぬものでありながら、それでいて全く一様に「このもの」でも「かのもの」でもあるところの単純なもの、<sup>21</sup> すなわち「普遍的なもの」となるという。廣松のみるところ、ヘーゲルにあつては、真の主語＝実体はあくまで絶対精神であり、「実体＝主体の自己展開過程をあの「精神」という本源的な存在の自己疎外的な自己定立過程だとみなしている。」<sup>22</sup> 対してマルクスは、「われわれ」たるヘーゲルの實述によって感覺的確信から絶対知へと引き上げられるという論理構成を、意識して当事者の立場（フュア・エス）と学知的立場（フュア・ウンズ）に切り分けたと廣松はみている。そしてこうした論理は『資本論』での価値形態論のロジックと物神性論の占める論理的位置を理解するうえで鍵となるという。

---

<sup>20</sup> 廣松前掲書、53 頁。

<sup>21</sup> ヘーゲル『精神の現象学 上』（金子武蔵 訳、岩波書店、1971 年）、99 頁、傍点ママ、引用箇所は廣松からの重引。

<sup>22</sup> 廣松前掲書、68 頁、傍点ママ。



価値形態論の行論において、商品そのものが価値実体、価値量、価値形態をそれ自体として備えているかのように、そして、商品が相互関係を結びつつ、自己運動するかのように見えるのは物象化的な倒錯現象であると廣松は述べる。マルクスは価値形態を論じた後の第四節「商品の物神的性格とその秘密」において、その物象化的倒錯は社会的関係の反映であると看破したという。第四節につづく第二章「交換過程」ではじめて生産物の交換が事実として認められる。つまり生産の後に交換が行われ商品が生成するという歴史的な順序と、価値形態論で交換の存立機制を理論的に解明した後で、交換過程論において事実問題として交換を論じるという叙述上の（論理的な）順序が、交錯しているのである。

廣松によれば、価値形態論の場面では、商品なる主語的主体＝主体の主語が内在的矛盾にもとづいて自己展開していくのではない。価値形態論では学知が静態的にその商品の展開を分析しているのであって、つづく物神性論の箇所では商品に備わる超感覚的な性質を成り立たせているのが社会的な関係であることを説いているという。すなわち、廣松が物象化を抜け出さずを目指したとするならば、価値形態論にそのモメントを見出そうとしたのではないということまでは言うはずである。

ヘーゲルにおける学知が静観的に観望するだけであるのに対して、著者であるマルクスの体現する学知は積極的に舞台回しの役を演じる。マルクスにあっては、学知は体系叙述者であると同時に体系の批判者である。このとき、学知は当事意識が自律的に向上する歴史的な進展を待つ必要はない。体系的叙述の論理的な必要に応じて、学知は叙述の順序を選ぶことができるという。<sup>23</sup>

先に述べたように、マルクスは歴史性と論理性が一致しているとしてヘーゲルを批判したのであった。というのも、歴史性と論理性が完全に一致している場合には、体系に内在する当事者は体系に外在する超越者に引き上げられるという構制になるからである。ヘーゲルにおいて、その超越者とは絶対精神である。ヘーゲルの場合と異なり、マルクスにおいて歴史性と論理性とは相即しないと廣松は繰り返し述べている。

この端的な止揚を図るためにも、しかし、ここでは一たんかの“第一途”に仮託し

---

<sup>23</sup> 廣松渉『物象化論の構図』（岩波書店、1983年）、127頁。

つつ、『資本論』の冒頭商品の歴史性をめぐる往々にして不毛な争論をも防遏しておこう。/「抽象的一般者」、例えば「言語」そのものなどというものは、なるほど実在せず、実際に存在するのは、英独仏語、ラテン語、サンスクリット語等々の具体的歴史的な諸言語だけである。そして、心理的過程としては、特定の言語を念頭におくことなくしては「言語」なるものを考えることすらできない。たとえ、インド・ヨーロッパ原語 *Ursprache* なるものを復元しえたとしても、それとて歴史的具体的な言語であって「言語そのもの」ではない。しかし、インド・ヨーロッパ語系の「言語」そのものという抽象的概念に“最も適合的な実在的言語はどれか”という段になれば、かの「原語」とやらが最も適合的な表象を供するものと云えるかもしれない。『資本論』の冒頭商品についても同断であって、マルクスは恐らく発達した商品社会の商品を心理的には表象していたであろうけれども—そして富が「膨大な商品集成」として現象するのは発達した資本制のもとにおいてであるけれども—一端初商品としての論理的要求に最も適合的なものという段になれば、それは或る条件下での単純商品だということもありうる。しかし、マルクスは、歴史的に実在するあれこれの単純商品について論じているわけではないし、いずれにせよ端初商品をそのまま体現した商品は—「言語」そのものをそのまま体現した歴史的言語が実在しないのと同様—実在しないのであって、“冒頭商品はどの歴史的商品について論じているのか”という仕方では歴史性を問うのは次元の交錯であると云わざるをえない。<sup>24</sup>

ここで廣松は、ある歴史的な文脈で事実として交換された商品を冒頭商品として想定することは誤りであるとし、冒頭商品の歴史性を問う議論を厳しくしりぞけている。また同様に、1947 年に行われた資本論研究会の出席者であった宇野弘蔵の弁証法は歴史性と論理性が一致する立場になっていると廣松は次のように指摘している。

宇野先生の場合の弁証法というのは、先生自身は歴史性と論理性は一致するわけではないことを強調なさっているんだけど、岩田氏ほどではないにしても結局つきつめ

---

<sup>24</sup> 廣松渉『マルクス主義の理路』（勁草書房、1974 年）、68～69 頁、傍点ママ。

て言うと、歴史性と論理性とが一致するようなパターンになってしまっている。<sup>25</sup>

他方ではしかし、廣松の『資本論の哲学』の出版後まもなく鼎談「座談会「資本論の哲学」をめぐって」(『現代の眼』1975年1月)が組まれており、宇野経済学派である降旗節雄とのやりとりの中で、冒頭商品に相当するものを現実のうちに求めるならば、単純商品に近くなるとも述べている。

端初の商品というのは決して歴史性と論理性が一致しているという意味での単純商品じゃないんだけど、下向の極限として措定された抽象的な存在としての端初商品はそれがまさしく歴史的具体的諸規定を捨象されているという事情から、単純商品モデルに近いだろうということ、これは端初そのものの持っている性格としてそうならざるを得ないんじゃないか。<sup>26</sup>

このように廣松自身にも歴史性と論理性をどう区別するかについては葛藤があったと推測されるが、歴史性と論理性が一致しかねないという端初論の宿命的構造は十分に自覚していた。同鼎談では、価値形態論の位置づけについても、価値形態が展開していく動的な過程よりも、マルクスは共時的な構造分析に徹していると廣松は述べている。商品のうちにエージェントのようなものが備わり、それが自己展開していくという議論では、商品のうちにある種の超越的なものを前提としていることになる。そうではなく、交換過程論で生産物から商品へと成ったものを、叙述の論理的順序のために『資本論』冒頭に据えたのである。それゆえ、価値形態論では商品が歴史的に展開していく過程ではなく、論理的な分析が行われていると廣松はみなしたのであった。動的なモメントはその後の叙述に持ち越されることとなる。

---

<sup>25</sup> 廣松渉「宇野経済学方法論をめぐる問題点」：『廣松渉コレクション第四巻 物象化論と経済学批判』（情況出版、1995年）、246頁。

<sup>26</sup> 降旗節雄・今村仁司・廣松渉「座談会「資本論の哲学」をめぐって」：『現代の眼』（現代評論社、1975年1月）、278頁。

#### 4. 二つの価値と共通の第三者としての抽象的人間労働

まずは、『資本論』冒頭で端初に据えられた商品の分析をマルクスに即して辿っていく。

第一章「商品」第一節「商品の二つの要因 使用価値と価値（価値実体 価値量）」では、使用価値と交換価値について説いている。「商品は、まず第一に、外的対象であり、その諸属性によって人間のなんらかの種類の欲望を満足させる物である」<sup>27</sup> という。商品は、たとえば飲み食いする作るなどといった一つの有用物であるわけだが、その物の有用性が、その物を「使用価値」にするのである。「使用価値」はそれ自体としては、なんらかの社会的生産関係を表現するものではない。使用価値は、「ただ使用、または消費によってのみ実現される」のである。そして、「われわれが考察しようとする社会形態〔商品世界〕にあっては、それ〔使用価値〕は同時に素材的な担い手になっている—交換価値の。」<sup>28</sup>

「交換価値」は、「ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合」であり、偶然的なもの、純粹に相対的なものであるかに見える。交換価値を考察したとき、第一に「同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの同じものを表している」。そして第二に、「それとは区別される或る実質の表現様式、「現象形態」でしかありえない」。

さらに、たとえば小麦と鉄という二つの商品をとって見たとき、それら二つの商品が交換されるという関係は、 $1 \text{ クォーターの小麦} = a \text{ ツェントナーの鉄}$ という等式で表わされる。この等式は、同じ大きさの一つの共通物が、二つの違ったもののうちに存在するということの意味する。それゆえ、二つの商品は、その一方で他方でもない共通の第三者に還元されるのである。この交換関係の特徴づけているのは、諸商品の使用価値の捨象であり、その後に商品体に残るものは、労働生産物という属性だけである。それでは、この労働生産物に残っているものとは何であろうか。マルクスはこう述べる。

それらに残っているのは、同じまぼろしのような対象性のほかにはなにもなく、無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物のほかにはなにもない。これらの物が表わしているのは、ただ、その生産に人間労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけで

---

<sup>27</sup> マルクス『資本論』第1分冊（岡崎次郎 訳、大月書店、1972年）、71頁。

<sup>28</sup> マルクス前掲書、73頁。

ある。このようなそれらに共通な社会的な実体の結晶として、これらのものは価値—商品価値なのである。<sup>29</sup>

このくだりを、廣松は「商品価値は抽象的人間労働という「社会的実体」の結晶であることが定立される」とまとめているが、その後で、この箇所の矛盾を指摘している。すなわち、「社会的実体の結晶」としながら、他方で「生理学的意味での人間的労働力の支出・凝結」としているのは矛盾ではないのか。これには、マルクスが俗流投下労働価値説と対決しつつ、他方で支配労働価値説や構成価値説とも対決していく必要があったという経緯があった。この箇所に関する暫定的な結論として廣松は以下のように述べている。

さしあたって行論の論理構造からいっても、価値が価値対象性として規定される所以の関係性、抽象的人間労働が指定される所以の社会的規定性は、少なくとも最低限、価値形態論における商品関係の討究を俟つことなくしては明示的に説くことはできない。<sup>30</sup>

つまり、マルクスの行論において、抽象的人間労働は価値形態を論じる前の第一節「商品の二要因論」で扱われているが、より明確に指定されるのは価値形態論においてなのである。

それでは、こうして『資本論』冒頭で矛盾を孕みながらも提示された抽象的人間労働の社会的規定性とはいかなるものなのだろうか。マルクスが価値形態論を定立するにいたった経緯に即してみていきたい。

廣松によれば、マルクスが価値形態論を自覚的に定立するにいたったのは、1862 年時点における『剰余価値学説史』の執筆過程で行われたリカード価値論の再検討であった。そしてとりわけ、その機縁となったサミュエル・ベイリーとの対質は、マルクスの説く「価値」の存在性格、すなわち価値形態論が唯名論と実念論との対立という中世以来の「普遍論争」を超克する地平を拓いているという。

---

<sup>29</sup> マルクス前掲書、77 頁。

<sup>30</sup> 廣松渉『資本論の哲学』（平凡社、2010 年）、95 頁。

ベイリーが価値を二物体間の距離になぞらえた議論は、『資本論』価値形態論の等価形態の箇所ではベイリーの名を挙げるに値しめたものだという。しかし、廣松はベイリーが三者関係に気付きながらも二者関係の論理に押しとどまっていると限界点を指摘している。

ベイリーは、先に見た通り、二商品間の価値関係は、それが距離になぞらえられるとはいっても、決して単なる二物間の関係ではないこと、それは「諸商品一般 commodities in general」との関連 reference を含意することを述べている。この際、第三者たる諸商品一般は、単なる諸商品の代数和的集合ではない筈である。けれど、もしそうであれば、今問題の二商品と入れ換えていくとき、全くの循環に陥り、唯、すべての商品どうしの全般的な比較ということになり了るからである。そこで、ベイリーは、当の第三者を、直ちに貨幣で置き換えてしまう。だが、貨幣といえども、この文脈では、単なる一商品たるにすぎない。ベイリーは、こうして、二商品の価値関係が必然的に第三者との関連を含意すること、単なる二者関係ではないことに気付きながらも、結局は単なる二者関係の論理構制に押しとどめてしまう。<sup>31</sup>

マルクスは、ベイリーとの対質を踏まえて、こうした価値関係を成り立たせている共通の単位が何であることを問う。そしてマルクスが価値の内在的尺度としてとらえるのが抽象的人間的労働である。ここで廣松は抽象的人間的労働の規定を具体化し次のように述べる。

マルクスが価値の実体として、したがってまた、価値の内在的尺度として「労働」を云為するとき、その労働量は、現実投下されて凝結している労働量ではなくして、それを現時点で再生産するとした場合、現時点の生産性の水準のもとで、再生産のために社会的に必要とされる労働の量なのであり、この「社会的実体」は決して不易な形而上学的実体ではない。それは、その内実においては、一種の社会的な関係規定なのである。<sup>32</sup>

---

<sup>31</sup> 廣松前掲書、143～144 頁。

<sup>32</sup> 廣松前掲書、138～139 頁。

このことの意味は重要である。再生産のために社会的に必要な労働量とは、固定的なものではなく歴史的・社会的な諸関係の結節ともいうべきものであり、それを廣松は「社会的諸関係の“函数”である」という。つまり、マルクスは価値の実体を自明視する価値実在論とベイリー流の価値唯名論との相克を、一定の社会的関係からの被媒介的な反照規定である抽象的人間労働によって超克したのである。<sup>33</sup> かくして廣松は、関係の規定性たる共通の第三者として抽象的人間労働を位置づけたのであった。

## 5. 価値形態論の四肢的構造

マルクス自身が『資本論』初版序文で断っているように、価値形態に関する一節、すなわち第三節「価値形態または交換価値」は最も難解である。価値形態論で課題とされたのは、「貨幣形態の生成を示すこと」、「諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態にまで至るまで追跡すること」<sup>34</sup>であった。廣松は、『資本論』再版で最も大幅な改訂の施された箇所が価値形態論であるとし、『初版』とその附録、および『再版』とを比較している。そしてその上で、「附録を含む初版と再版との理論構制は基本的な構造に即してみるかぎり、同一であるように看取される」<sup>35</sup>という。『資本論』の成立史に關説したのち、廣松は内田弘氏を援用し、マルクスは『資本論』で資本制社会という対象とわれわれの商品を見る認識構造（主体）とを同時に批判したとしている。廣松はこうした視座に立ち、「商品世界」の認識論的・存在論的な存立構造の基礎を価値形態論の位相で把握することを目指している。つまり廣松は、商品世界における当事主体の認識枠組とその主体のあり方を、価値形態論において解こうとしているのである。

ここで価値形態論の大枠を整理しておきたい。マルクスの価値形態論は以下の四つの形態で構成されている。

---

<sup>33</sup> 吉田憲夫氏は、こうした廣松の「抽象的人間労働」論は「価値実体と価値形態の相関的存立」という論点を初めて提起したものであるとしている。吉田憲夫『資本論の思想 マルクスと廣松物象化論』（情況出版、1995年）、85頁。なお同書では、廣松のいう「抽象的人間労働」が悟性的・抽象的な“無”・“主観的観念”にすぎないのではないという点が指摘されている。吉田前掲書、56～57頁。

<sup>34</sup> マルクス前掲書、94頁。

<sup>35</sup> 廣松前掲書、157頁。

形態Ⅰ 「単純な価値形態」

20 エレのリンネル＝1 着の上着

形態Ⅱ 「全体的な、または展開された価値形態」

20 エレのリンネル＝1 着の上着、または 10 ポンドの茶、または 40 ポンドのコーヒー、  
……または＝その他

形態Ⅲ 「一般的な価値形態」

一着の上衣＝	}	20 エレのリンネル
10 ポンドの茶＝		
40 ポンドのコーヒー＝		
等々の諸商品＝		

形態Ⅳ 「貨幣形態」

一着の上衣＝	}	2 オンスの金
10 ポンドの茶＝		
40 ポンドのコーヒー＝		
等々の諸商品＝		

マルクスの行論では、価値形態論の内部ではもっぱら「商品語」で語っており、第二章交換過程論にいたってはじめて「商品の守護者 **Hüter** 商品所有者を顧慮」する立論になっているという。すなわち、20 エレのリンネルが一着の上衣に値するという関係をみたとき、「さきに商品価値の分析がわれわれに語ったいっさいのことを、いまやリンネルが別の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは自分の思想をリンネルだけに通ずる言葉で、つまり商品語で言い表すだけである」<sup>36</sup> という。

---

<sup>36</sup> マルクス前掲書、101 頁。



これに対して、交換過程論においては、次のように商品所有者を登場させている。「商品は、自分で市場に行くことはできないし、自分で自分たちを交換し合うこともできない。だから、われわれは商品の番人、商品所持者を捜さなければならない。」<sup>37</sup>

価値形態論において「当事主体」をどう位置づけるかは、研究史上においても重大な争点であり、『価値形態論と交換過程論』（1957）を著わした久留間鮫造と宇野弘蔵との論争があった。それは、先に挙げた 1947 年の資本論研究会での議論が元となって始まった論争である。研究会では、交換過程論では欲望の主体としての商品所有者が考慮の範囲内に入ってくるが、価値形態論ではそれが捨象されているという報告者の論をめぐって、「商品所有者の欲望を捨象してはたして価値形態論が理解できるかどうか」<sup>38</sup> が中心的に議論された。久留間を含め大部分の研究会参加者が報告者の論に同意したが、宇野弘蔵は「商品所有者の欲望を抜きにしては価値形態は理解できない」<sup>39</sup> ことを強硬に主張したという。議論は未解決に終わったが、その後久留間は、1950 年 1 月に「価値形態論と交換過程論」を「経済志林」に連載し応答したのだった。

廣松の解釈では、価値形態論における当面の課題と目的に照らせば、二商品の等置 *Gleichsetzung* が存立しているという所与の事態からはじめればよいという。廣松によれば、交換がどのように行われたかという事実問題は第二章の交換過程論で扱う事柄であり、二商品の等置という事態の意味する事柄を学的見地から分析するのがマルクスの方法である。そして、当事者の見地が直截問題となるのは、物神性論からであると廣松は断言する。

商品所有者の「欲望」をめぐる宇野弘蔵・久留間鮫造の論争において、宇野弘蔵は交換過程論で扱われるはずの商品所有者の欲望を価値形態論に前倒するという理解をしており、廣松もおおむねその論に拠っている。すなわち、「二商品の二商品の等置・交換の過程という事実の問題が、もとより、当事主体たる商品所有者の「欲望」をぬきにしては成立しえない」という。<sup>40</sup> しかし他方で廣松はこうも述べる。「価値形態論が、謂うなれ

---

<sup>37</sup> マルクス前掲書、155 頁。

<sup>38</sup> 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』（岩波書店、1957 年）、3 頁。

<sup>39</sup> 同上。

<sup>40</sup> 廣松前掲書、180 頁。

ば *quid juris* [権利問題] に関わるかぎり、当事主体の欲望という対自的な意識次元は具体的な内実においては捨象されうる。」<sup>41</sup>

つまり、商品の交換は欲望なしには成立しえないとしながらも、その内実においては欲望と意識は捨象されうるという、一見矛盾するかにみえる論を立てている。

ここで廣松は「欲望」を当事者の立場と学知的立場という別の視点からみることによって、当事主体の意識と視座を切り分けているのだが、それはいかにして可能になるのだろうか。当事主体の意識を捨象しながら視座を確保するという手法を廣松は次のように説明する。

マルクスは、当事主体の対自的な意識を捨象しうるかぎり、「商品語」をリンネルに語らせる。そこには、当事主体の意識事態を勘案すれば、行論に無用の錯綜を持ち込みかねないという配慮があったのではないかと思われる。リンネルが「商品語」を語るということは、実際には、学知がフュア・ウンスな立場から、“聴取” *vernehmen* することであり、しかも、語るのがリンネルであるということにおいて、視座がリンネル所有者の側に構えられているわけである。マルクスとしては、リンネルに商品語を語らせるという手法をとることによって、実はこのような方法論的地歩を確保している次第なのである。

つまり、リンネルの「商品語」を学知が“聴取”するという方法が、当事主体である商品所有者の意識を捨象しつつ、リンネル所有者の視座を確保したのである。リンネルは自分の価値を“自称”したり“宣言”することはできず、上衣を価値物として自分に等置することによって被媒介的に自己の価値存在を措定しうるという。そして、この被媒介的規定を可能にしているのが、抽象的人間労働である。

リンネルと上衣、両商品とその生産者たる当事主体を想定するとき、二つの商品の等置は、具体的有用労働の所産たる商品の等置を意味する。そしてこうした具体的有用労働の等置を可能にしている共通の第三者が抽象的人間労働なのであった。マルクスが述べてい

---

<sup>41</sup> 同上。

るように、商品の等置のうちに同等性関係があることを見抜いたのはアリストテレスであったが、それを可能にしているのが抽象的人間労働であることまでは見抜けなかった。アリストテレスの天才をもってしても、価値関係の分析を最後までなしえなかったのは、彼の生きた時代的な制約による。すなわち、アリストテレスは、奴隷労働を基礎とするギリシア社会にあって、労働の同等性に気付きえなかったのである。

等置関係を裏から支えるこの抽象的人間労働について、廣松は哲学的に読み解いている。

A にとって上衣の生産・所有者たる B は、現与のリンネルと上衣との等置関係が、第二形態の一モメントとみなされるかぎり、没具体的＝抽象的な主体であり、そのような抽象的な生産主体の所産たる上衣は、労働生産物であるとはいっても、抽象的人間的労働の体化物として *gelten* [妥当] する。もちろん、眼前の上衣はあくまで具体的な使用価値物たることをやめない。詳しくいえば、眼前の具体的な上衣という生産物が抽象的人間労働の生産物として、つまり、B にとっての具体的な有用労働の生産物が A にとっては抽象的人間労働の生産物として二肢の二重性の相で *gelten* [妥当] するのである。<sup>42</sup>

ここでリンネル所有者 A と上衣所有者 B とは相互共軛的である。このようにみたとき、それぞれ二肢の二重性の相で妥当する二つの商品の等置は、都合四つの契機、四肢によって媒介されていることになる。さらに敷衍して廣松はこう述べる。

この関係は、A と B にとって共軛的であり、A と B とが、単なる対自的な見地でも、単なる対他的な見地でもなく、対自的・対他的、対他的・対自的な、まさしく間主体的（共同主観的）な見地に *für uns* に立つことにおいて、両生産物の質的かつ量的な等置関係が存立しうるのである。<sup>43</sup>

ここでいわれる、対自的・対他的、対他的・対自的な、間主体的（共同主観的）な見地とは、

---

<sup>42</sup> 廣松前掲書、190 頁、傍点ママ。

<sup>43</sup> 廣松前掲書、195 頁。

抽象的人間労働を媒介にした「廻り道」によって可能になっている。廣松によれば、この対他的被媒介性の構造をマルクスも明示的には説いておらず、ヘーゲルを援用して反照規定を云々しているにとどまっているという。それはよく引かれる次の箇所だろう。「およそそのような反省規定というものは奇妙なものである。たとえば、この人が王であるのは、ただ、他の人々が彼にたいして臣下としてふるまうからでしかない。ところが、彼らは、反対に、彼が王だから自分たちは臣下なのだと思うのである。」<sup>44</sup>

しかし、抽象的人間労働による「廻り道」を介在させない、こうした単なる関係行為においては、対自・対他の反照に気づきにくいと廣松は指摘する。

こうした「廻り道」の論理を廣松は価値形態論の展開式においても援用している。価値形態のⅡとⅢを比べたとき、単なる数式としてみれば、価値形態Ⅲ「一般的価値形態」は、第Ⅱ形態「全体的な、または展開された価値形態」の両辺を入れ換えたものにすぎない。しかし、このⅡからⅢへの逆倒の解釈は価値形態論の解釈において重要な位置を占める。

たとえば社会思想史研究会をともにし、廣松と学問的交流の深かった今村仁司は、第Ⅱ形態は、暴力と闘争と死の形態であるとし、第Ⅲ形態へ移行するさいに「第三項排除」が発動すると述べている。いわば万人による万人の闘争状態といってよいカオス的社会状態からたたき出された第三項＝スケープゴートは、恣意的で偶然的であるという。この恣意性・偶然性・不確定性を今村は一言で要約して、第三項排除のゲーム性 (Game, jeu, Spiel) であるとしている。<sup>45</sup> ここでカオス状態である第二形態から秩序のある第三形態へと時間的に移行するのではない。叙述の分析的順序として第二形態と第三形態は区別されているが、社会形成の運動過程としては両者は同時的であるという。つまり、今・現在においては両者が入り混じり沸き立った状態にある。こうした今村の解釈に比べると、廣松のⅡからⅢへの逆倒の解釈はいささか静観的であるといわざるをえず、非対称性を見出すことは困難である。<sup>46</sup>

---

<sup>44</sup> マルクス前掲書、111 頁。

<sup>45</sup> 今村仁司『排除の構造』(ちくま学芸文庫、1992 年)、124 頁。

<sup>46</sup> 廣松の価値形態論には社会的諸関係における「命懸けの飛躍」や“一瞬の亀裂”への視線が希薄であることは以下でも指摘されている。対して、初期マルクスの疎外論における〈死〉の矛盾にこだわった論者として吉本隆明、後期マルクスの価値形態論・価値尺度論における「命懸けの飛躍」にこだわった論者として宇野弘藏と柄谷行人が挙げられている。新田滋『恐慌と秩序 マルクス〈資本論〉

われわれにとっては、しかし、この第三形態というのは、第二形態で相対的価値形態の側に対自的にあったリンネル生産・所有者 A の対他的な事態を定式化したものである。それゆえ、上空飛翔的に眺めれば、ないしはまた、当事主体たちの即自的な意識にとってみれば、第二形態と第三形態とは同一事であるが、しかし、当事主体の視座に立って対自的な事態と対他的な事態との区別と統一を分析するフュア・ウンスな学知にとっては、両者は異相である。<sup>47</sup>

なるほど廣松は、抽象的人間労働を媒介にした「廻り道」の論理は時間的に継起する諸過程ではないと断っており、共時的存立構造の諸象面として価値形態の展開を分析している。それゆえ、先にあげた鼎談でも触れているように、マルクスは価値形態論に動的な展開をみるよりも構造分析に徹していると廣松は解釈しているのである。むしろ廣松が重くみるのは、こうした「廻り道」を成り立たしめている汎通的・社会的な関係行為である。

かの「廻り道」が成立する所以の、他者の生産物の価値物としての措定、他者の労働の抽象的人間的労働としての措定、これは、かの第二形態の無限系列で表現され、対他的には第三形態で定式化されるとき、汎通的・社会的な関係行為においてなのである。<sup>48</sup>

こうして廣松は価値形態論の解釈においても、第二形態と第三形態との逆倒を社会的諸関係の函数である抽象的人間労働によって説明したのだった。しかし廣松の価値形態論には非対称性や当事者が社会システムを内から破る契機を見出すことはできない。というのも、価値形態論においては、商品の等置をつねに社会的関係規定である抽象的人間労働が裏から支えているため、商品世界を超出するといった当事者の意識は捨象され、その視座だけが確保されているのみであるからだ。等置、すなわち同一化の原理で価値形態論が分析されており、当事主体のモメントは後景にしりぞいている。

---

と現代思想』(情況出版、2001年)、194頁。

<sup>47</sup> 廣松前掲書、199～200頁。

<sup>48</sup> 廣松前掲書、201頁。

次節では、こうした価値形態論解釈を踏まえて、いかにして物象化を抜け出そうとしたのかを検討する。

## 6. 物象化論と観念的扮技による役割理論

廣松の連載稿『資本論の哲学』は、マルクスの『資本論』の第一章、第二章を扱うにとどまり、価値形態論及び交換過程論においては商品世界内部の当事者が物象化から覚める契機を積極的には打ち出していない。廣松は次の段階として、「労働力の商品化」という物象化現相、それを支える資本制的商品「生産」社会の基底編制構造へと向かうことを表明している。

同時期に社会学者の真木悠介が「現代社会の存立構造—物象化・物神化・自己疎外」を『思想』に連載し、廣松の『資本論の哲学』の末尾「暫定的定位—拾遺と補説のために」でも同連載が検討されている。1973年7月に両者の間で行われた座談会「物象化・存立構造論としての『資本論』『思想』」においても、真木と同連載が検討された。その中で問われたのは、歴史的な社会に内在しつつ、そこから超越する主体的実践はどのようにして可能であるかという問題であった。真木悠介は、『現代社会の存立構造』の系列に属する近代理性の地平を超えた理論構築を進めるという方法と、見田宗介名義で発表した「価値空間と行動決定」といった系列に属する、近代世界の内部に実存して、その矛盾を生きる主体を描くという方法を切り分けたという。

それに対して、廣松は『資本論の哲学』の末尾および先の対談で、分業的協働の場面での役割行動に着目している。「分業的協働として営まれる対象的活動としての労働、そこにおける生産手段との関わり方および協働的な関わり方の編制構造が物象化する経緯と機構、この点を「役柄行動」として営まれる対象活動的協働の存立構造として押え、この場面でいわゆる「社会的権力」 *soziale Macht* ないし『資本論』に密着していえば、近代的工業の技術的生産過程の編制の場における *Autorität* の存立構造を押えておきたいと考えている。」<sup>49</sup>

廣松は、超越者の高みに拙速に同一化するという方法はとらず、社会システムに内在的

---

<sup>49</sup> 廣松前掲書、354頁。

な立場から実践の場に移す途を模索しているといつてよい。あくまで当事者の立場から社会を揺り動かすことを廣松は目指している。ここでは物象化を抜け出る可能性を廣松がどこに見定めたのか、その一端を探る。

廣松が物象化のなかでもっとも抜け出すことが難しいとみているのは、商品物神である。というのも、商品につきまとう物象化的錯視は認識すれば抜け出せるといった生易しいものではなく、そうした認識すらも総社会的な関係の結節であるからである。廣松が価値形態論の読解で示そうとしたのは、商品世界に生きる人間の認識枠組であった。それゆえ、廣松は価値形態論においては商品世界から抜け出るような実践的なモメントを見出すことはなかった。しかし、廣松はそうした物象化に染められた世界を受け入れているわけではなく、物象化が消失した社会を目指していることは次のことばからも伺うことができる。

今問題の物象化的錯視は、かつて過去の或る歴史的条件のもとでは存立していなかったし、将来の或る歴史的条件のもとでは、即自的な意識からも消失するものと予想される。「人々が彼らの労働や労働生産物に対してもつ社会的関係が、生産においても分配においても透明」なところでは、労働生産物の価値性格という物象化的な倒錯視は生じない。<sup>50</sup>

物象化的錯視が生じる機制についてみるために、廣松が『資本論』において最重要視しているといつてよい第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」の詳細を見ておこう。そこで、マルクスは次のように述べている。

商品は、一見、自明な平凡なものに見える。商品の分析は、商品とは非常にへんてこなもので形而上学的な小理屈や神学的小言でいっぱいなものだということを示す。商品が使用価値であるかぎりでは、その諸属性によって人間の諸欲望を満足させるものだという観点から見ても、あるいはまた人間労働の生産物としてはじめてこれらの属性を得るものだという観点から見ても、商品には少しも神秘的なこ

---

<sup>50</sup> 廣松前掲書、277 頁。

ろはない。人間が自分の活動によって自然素材の形態を人間にとって有用な仕方に変化させるということは、わかりきったことである。たとえば、材木で机をつくれば、材木の形は変えられる。それにもかかわらず、机はやはり材木であり、ありふれた感覚的なものである。ところが、机が商品として現われるやいなや、それは一つの感覚的であると同時に超感覚的であるものになってしまうのである。<sup>51</sup>

机を使用価値としてみる分には、つまり実際に机として使う分には、どのように形を変えようともなんら神秘的なところはない。しかし、机を商品として扱ったとたんに、超感覚的な事物としてあらわれるのである。つまり、商品世界内的な日常的な意識にとっては、超感性的・超自然的な或るものとして、すなわち価値を持ったものとして商品はあらわれる。そして、その価値は意識しようとして容易に払しょくできるものではない。

それではこの商品の神秘的な性格はどのようにして生じるのであろうか。マルクスはこう説明する。

商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させるということである。このような置き換え〔*Quidproquo*：廣松の訳語では倒錯視〕によって、労働生産物は商品になり、感覚的であると同時に超感覚的である物、または社会的な物になるのである。<sup>52</sup>

つまり、人と人との社会的関係、それも生産物をつくる異なる種類の私的諸労働の関係が、商品となった生産物の関係としてあらわれるのである。そして、この現象がマルクスの物象化であると廣松は見なしたのであった。互いに異なる私的労働が同等のものとみなされるのは、抽象的人間労働としてもっている共通な性格へ還元されることによってしかなされない。そしてこうした置き換えは異種の諸生産物を交換することによってなされる。

---

<sup>51</sup> マルクス前掲書、133 頁。

<sup>52</sup> マルクス前掲書、135 頁。



だから、人間が彼らの労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらの物が彼らにとっては一様な人間労働の単に物的な外皮として認められるからではない。逆である。彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等置することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等置するのである。彼らはそれを知ってはいないが、しかし、それを行うのである。<sup>53</sup>

みられるように、諸生産物の交換によって自らの私的労働を等置するという行為は、「知ってはいないが、しかし、それを行う」つまり無意識のうちに行われる。また、後の第2章交換過程で「太初に業ありき。だから、彼らは、考えるまえにすでに行なっていたのである」とあるように、交換は始原にあったものとされる。それゆえ、交換は歴史的現実的に行われたものとして前提とされたうえで、交換の存立機制が価値形態論において問われたのであった。

廣松によれば、商品交換が汎通的に行われる社会においては、商品所有者たちはいずれも抽象的・脱人称的な第三者の仲介的評価を“観念的に扮技”し、みずからの評価基準たらしめざるをえない。二者関係の交換にみえる場合でも、価値形態論の二極的構造の複合として三極的な交換が行われている。偶然的な一回限りの交換であれば、二者関係でも行われるが、それがある程度安定的に行われるには、三極的な媒介が必要となる。つまり、各々の商品所有者は抽象的な第三者の立場を観念的に読み取るのだが、「この抽象的第三者が関心するのは価値物としての限りでの所有物であるから、各人は互いに他者の物品を価値物として、従ってまた、その生産的所持者をこの等質的な価値の生産主体として、認知・承認する。」<sup>54</sup> このような商品所有者たちの相互的な認知・承認が行われることによって商品世界が成り立っていると廣松はいう。しかし、商品所有者は抽象的第三者によって成り立つ商品世界にそのつど同一化するという機制になっており、商品世界を内から突破する主体性をすくい取ることは困難である。

ところで廣松は、この機制と構造的に同型の議論を別の文脈で行っているのを見ておきたい。それは、『資本論の哲学』執筆と同時期に発表された「存在の哲学と物象化的錯視

---

<sup>53</sup> マルクス前掲書、138頁。

<sup>54</sup> 廣松渉『資本論の哲学』（平凡社、2010年）、307頁。

ーハイデッガー批判への一視軸』『現代思想』(1973 年 1 月)の中の議論である。そこで主題的に検討されているのは、ハイデッガーによる「道具的存在者」Zuhandenes (用在)の「道具的存在性」Zuhandenheit (用在性)の現象学的分析である。同論文では、ハイデッガーの物象化的錯視が厳しくしりぞけられているが、それにはハイデッガーの用在的世界了解を廣松が批判的に継承するという意図があった。

道具というのは、一つだけで道具として存在することは決してなく、「個々の道具に先立って、そのつどすでになんらかの道具全体性が暴露されて *entdeckt* いる」<sup>55</sup> というのがハイデッガーの議論である。これは道具を道具としてなりたたしめている道具全体性を前提とするものであるが、廣松はこのハイデッガーの道具的存在性の議論を次のように批判している。

われわれは、ハイデッガーの適所性の議論においては、道具的存在性の「ある」が暴露・発見されるという仕方では配視に対しておのれを示すとされていること、「存在」そのものとしては配視に先立ってそのつどすでに存在しているものと了解されること、この“既在”性を見とがめる。<sup>56</sup>

これはたとえば、貨幣という道具は、物を購買できるという性質をもっており、適所的使用によりそのことが暴露されるということになるが、廣松はこれは道具的存在性に関する一種の物象化的錯視であるという。言語にしても同様で、日本語という言語が既在するのではなく、発話され聴取されるそのつど生産・再生産されることと同一の論理になっているという。それゆえ、道具的存在性の暴露・発見は物象化的錯視であるとして廣松はこう批判する。

しかるべき適所全体性という場＝世界においてのみはじめてそれは道具的存在者として存在する。まさしく、単なる個々人の主観的営為ではなく、適所全体性という場、

---

<sup>55</sup> 廣松渉「存在の哲学と物象化的錯視—ハイデッガー批判への一視軸」：『現代思想』(青土社、1973 年 1 月)、119～134 頁所収、125 頁、傍点ママ。

<sup>56</sup> 廣松前掲書、129 頁、傍点ママ。

当の機能的構造的連関が、使用のそのつど道具的存在性をそれとして存在せしめるのである。しかるに、ハイデッガーは、既存の道具的存在性の発見であるとそれを錯視してしまっている。<sup>57</sup>

ハイデッガーの道具的存在性の議論をこう批判したうえで廣松が導入するのが、「役割行動」の理論である。廣松は役割理論を導入するにあたり、カール・レーヴィットのハイデッガー批判からの影響を一定程度認めたうえで、新たな視角から役割理論を捉え返す。「われわれは、共同現存在を、用在的世界における本源的な実践的在り方に即して「協働」*Zusammenwirken* と規定し、人間の対他適所性 *Bewandtnis* を「役割」ないし「役柄」*Rolle* と規定する。」<sup>58</sup> 廣松の規定によれば、人間の実践はことごとく協働的な役柄行動の一種であることになる。廣松がよく用いる農作業の比喻でいえば、農地は過去から送られてきた自然と協働していることになり、農具を使用することは、それを製作した人々と間接的に協働作業をしていることになる。このようにして、廣松は「協働的役柄行為」という概念を措定する。道具的存在者を適所的に適用する役柄実践が、道具的存在性を“存在”せしめつつ、それに会おうのであって、覆われていた既存性が発見されるのではないという。覆われている既存性とは、廣松からすれば、その実、物象化的錯視である。

ハイデッガーにおける「物象化的錯視」の排却を、廣松は「不安」というかたちでの気遣いにおける「死」との関わりに即して、より詳しく説明している。

死への不安的気遣いという在り方、つまり、落命への恐怖ならざる「死との関わり」なる事態は、まさしく共同主観的な共同現存在においてあるのであって、決して“未在的に既在する”死を不安的気遣いが暴露・発見するのではない。<sup>59</sup>

ハイデッガーにあって、死は未在的に“既在”するものである。しかしそうではなく、死への不安的気遣いという在り方が死を存在せしめると廣松はいう。つまり実態としては、

---

<sup>57</sup> 廣松前掲書、130 頁、傍点ママ。

<sup>58</sup> 廣松前掲書、131 頁。

<sup>59</sup> 廣松前掲書、133 頁、傍点ママ。

死を未在的な相で“現在”させるのだというのである。

すなわち廣松は、共同現存在＝協働現存在における役柄実践によって物象化的錯視は排却できるとしたのだった。

ここで廣松は、ハイデッガーにおける「物象化的錯視」の排却のために役柄行動を指定しているのだが、『資本論の哲学』での行論と同様のタームを見出すことができる。それは、抽象的第三者の評価を「頭のなかで評価 esteem」し交換するという「交換的等置の観念的扮技」を論じた箇所で見られる「観念的扮技」というタームである。<sup>60</sup>

道具的存在性が道具的存在性として存在するのは、役柄行動において道具を道具的に使用する実践の場でのことである。例えば、ハンマーの道具的存在性は、それを道具的に使用する実践の場で発見されるのではなく、当の役柄実践においてはじめて存在するのである。＜中略＞唯、ハンマーは、われわれがそれを見たときに“使用”という役柄行動を“観念的に扮技”することにおいて、あたかもそれ自体で物を打つ道具としての存在性を“もっている”かのように思い込んでしまうだけのことである。道具的存在性は、それを道具的に適所を得せしめる役柄行動との相関性においてのみ存在する。<sup>61</sup>

『資本論の哲学』では、商品世界において価値を備えた商品を交換的に等置するさいに「観念的扮技」が行われるとされている。他方で先に挙げた「存在の哲学と物象化的錯視—ハイデッガー批判への一視軸」では、ハンマーの使用において、“使用”という役柄行動で「観念的扮技」が行われるとしている。前者においては、商品世界における物象化をまぬがれるのは困難であるとされているのに対し、後者でははじめて物象化的錯認の排却が目指されている。してみれば、『資本論の哲学』と「存在の哲学と物象化的錯視—ハイデッガー批判への一視軸」が発表された 1973 年の時点で、物象化を抜け出す可能性として

---

<sup>60</sup> 廣松は最晩年の著作『存在と意味 第二巻』で役割理論をより緻密に展開しており、そこで模倣的行動を扱った箇所でも「観念的扮技」というタームを用いている。廣松『存在と意味 第二巻』（岩波書店、1993 年）、425 頁。

<sup>61</sup> 廣松前掲書、132 頁、傍点ママ。

役割行動に着目していたとみなすことができるだろう。

商品世界に生きる人間が絡めとられている物象化から抜け出るには、物象化現象を認識することだけでは不可能であることを廣松は自覚していた。

物象化を克服するためには、その存在根拠をなしている現実的諸関係を現実に変革することが必須の要件である。旧来の現実的諸関係を解体しないかぎり、物象化現象が不断に生産・再生産される。<sup>62</sup>

物象化を抜け出すには、その機制を認識するだけではなく、主体が投げ置かれた社会の物質的基礎にはたらきかける実践的営為が必要条件となる。

じっさい、廣松は『資本論の哲学』をめぐってなされた鼎談で、交換という視角では垂直的なモメントを出すことは難しく、生産場面すなわち、社会の物質的基礎の次元の変革が必要であると述べている。

それが結局、私がこの本の初めに、生産一般から始めるか、商品から始めるかという議論に立入ったゆえんでもあるわけですが、マルクス自身いっておりますように商品というのは単なる客体的な定在ではなくて、いってみれば社会的関係の結節にほかならないわけで、その場合の社会的関係というのは、広い意味での生産関係を包み込んでいるわけですね。

そうなんだけれども、商品論から始めるかぎり、いまおっしゃった垂直的な構造といいましょうか、そこへはなかなか踏み込んでいけない。だから、生産一般というのは先に置く方式に私は惹かれる思いを捨てきれないわけです。<sup>63</sup>

この後廣松は、社会の物質的基盤に実践的にはたらきかけるための概念装置として役割理論の構築へと旋回していく。1983年の著作『物象化論の構図』の「跋文 物象化理論の

---

<sup>62</sup> 廣松渉『物象化論の構図』（岩波書店、1983年）、139頁。

<sup>63</sup> 降旗節雄・今村仁司・廣松渉『『資本論の哲学』をめぐって』：『現代の眼』（現代評論社、1975年1月）272～291頁所収、290頁。

拡張」では、廣松はマルクス・エンゲルスが構想した自然と社会との統一的な歴史の学を引き継ぐ意思を表明している。その中で、マルクスのいう社会的関係、すなわち「人々の対自然的かつ相互的な関係」に役割論的概念を読み入れることを企図している。「対自然的な関係」とは、舞台的に展られた自然に内・存在することを意味する。それは、労働対象・手段としての自然、たとえば農耕などを想起すれば分かりやすい。過去から送られてきた歴史化された自然に対する実践も、役割行動の概念に包摂されうる。「人々の相互関係」とは、生活世界＝世界劇場の舞台に投げ置かれたさまざまな当事者たちを意味する。

当事者たちは、そのつど他者が帯びた多種多様な価値や表情に触発されて行動する。このときの他者は、目の前の他者、あるいは規範性を帯びた環視的第三者であり、自然であることすらある。そうした他者からの「表情」「期待」に巻き込まれるようにして役割行動が遂行されるのである。

ここでいう当事者と他者とは、いいかえれば我と汝である。そのあいだで遂行される相互的役割行為には、非対称性の契機が含まれている。我と汝が出会う場面で、汝が我に向ける表情性は一様ではない。それどころか、汝が立たされている舞台によっても変わるといふ流動的なものである。我が汝の立場を観念的に扮技し、役割行動を起こすのだが、双方の思惑が一致するという保証はない。我・汝の相互的役割行動は、そうした矛盾・葛藤をつねに孕んでいるのである。

『資本論の哲学』で繰り返し論じられたように、交換的等置の観念的扮技で参照された抽象的第三者は商品世界に共通の第三者であった。しかし、役割行動を誘発する他者は不断に流動し、同一のものではない。他者は過去から送られてきた歴史化された自然や、現実的にかかわる共同体をも含む。それゆえ、そうした他者から寄せられる混沌とした表情・期待を梃子にすることには、主体性の余地が残されているのである。